

# 鳥取県米子市 福市四ツ塚谷横穴墓

1994年3月

財団法人 米子市教育文化事業団

## はじめに

今回の発掘調査は、福市地区急傾斜地崩壊防止工事に伴い、平成4年度、平成5年度に当事業団が実施した米子市福市四ツ塚谷横穴墓に関するものです。

調査の結果、丘陵の斜面から横穴墓や落し穴および不明土壌が確認されました。

この横穴墓は、6世紀末から7世紀に築造されたもので、周辺にみられるものと形態的には類似したものです。

今回の調査結果が、今後の横穴墓の研究を深め、古墳時代の墓制を明らかにする一助となれば幸いです。

調査にあたってご協力をいただいた地元のみなさんをはじめ、ご指導、ご助言いただいた方々および鳥取県米子土木事務所に対し感謝し、厚くお礼を申しあげます。

平成6年3月

財団法人 米子市教育文化事業団

理事長 森田 隆朝

## 例 言

1. 本書は平成4、5年度において福市地区急傾斜地崩壊防止工事に伴い鳥取県（米子土木事務所）から委託を受けて財団法人米子市教育文化事業団が実施した福市四ツ塚谷横穴墓の発掘調査記録である。

2. 調査の組織は下記のとおりである。

調査委託 鳥取県（米子土木事務所）

調査主体 財団法人米子市教育文化事業団（理事長 森田 隆朝）

調査担当 藤原裕子（財団法人米子市教育文化事業団調査員）

調査協力 米子市教育委員会

3. 調査にあたって、出土人骨については、井上貴央氏（鳥取大学医学部教授）、1号横穴については、亀井熙人氏（鳥取県立博物館）、中原 齊氏（鳥取県埋蔵文化財センター）から玉稿をいただいた。記して感謝したい。

4. 出土遺物及び関係資料はすべて米子市教育委員会で保管している。

5. 本書の編集及び執筆、図面の浄書などは米子市教育文化事業団調査員がこれをおこなった。

## 目 次

### はじめに

### 例 言

### 目 次

I 調査に至る経緯	2
II 周辺の歴史的環境	2
III 調査の概要	4
IV 調査の結果	6
V 附 編 「米子市四ツ塚谷遺跡5号横穴墓から検出された人骨に関するコメント」	14

鳥取大学医学部解剖学第二講座 井上 貴央

# I 調査に至る経緯

福市四ツ塚谷横穴墓は、米子市福市1826、1832番地ほかに所在する。

平成4年10月に鳥取県米子土木事務所より、米子市福市1826、1832番地ほかにおける福市地区急傾斜地崩壊対策工事予定地における埋蔵文化財の有無の照会が米子市教育委員会にあった。当該地は周知の遺跡（福市四ツ塚谷横穴墓）であり、同年米子市教育委員会の現地試掘調査の結果においても、工事予定地において遺跡の存在が確認された。

米子市教育委員会と鳥取県米子土木事務所の協議の結果、本調査の実施を決定し、鳥取県米子土木事務所より発掘調査の委託を受け、財団法人米子市文化事業団が平成4年度分を平成5年1月25日から平成5年2月10日まで、平成5年度分を平成5年12月1日から平成5年12月29日までの2年度に分けて現地調査をおこなった。

# II 周辺の歴史的環境

福市四ツ塚谷横穴墓は、米子市福市1826、1832番地ほかに所在し、ここは米子市の市街地からほぼ南東4kmに位置する。

周辺の遺跡として低湿地水田・集落跡で知られる目久美遺跡⑩や長砂第1・第2遺跡⑪など弥生時代前期の遺跡があり、弥生時代中期になると低湿地集落が営まれる一方で、台地上・山間部へと遺跡の分布が拡大され、福市遺跡⑫、青木遺跡⑬、奈喜良遺跡⑭などの集落遺跡が知られる。これらの集落は古墳時代に入っても引き続き営まれる。弥生時代後期になるとこれらの集落の他に新しい集落を形成する遺跡が多くなり、その中でも陰田遺跡群⑦の集落は、短期間に営まれる低丘陵上集落である。

弥生時代において、方形周溝墓や方形台状墓など相当の規模を有する墳墓が広範囲に営まれており、後期から終末期には大規模な墳丘をもつ有力な首長墓が各地に出現する。また米子市青木遺跡の方形周溝墓群は古墳時代前期に限って確認されており、山陰地方における方形周溝墓の出現は、他地方に比べてその消長は特徴的である。

古墳時代前期の古墳としては、墳丘多葬例として注目されている日原6号墓⑮が知られ、これは1辺20mの方墳で台状墓的な様相が強い。

古墳時代中期は前方後円墳がもっとも巨大化する時期であり、会見町三崎殿山古墳は全長110mの前方後円墳で西伯耆最大規模を誇る古墳である。その他にも40m～50mの前方後円墳が築造される時期である。また陰田41号墳では少女を埋葬した箱式石棺を主体部としていた。仿製斜縁八神鏡を出土した水道山古墳⑯もこの時期の古墳である。この時代の集落は今のところほとんど確認されていないが、本年度調査した吉谷トコ遺跡はこの時代の集落跡と考えられる。

後期になると小型の前方後円墳や大型の円墳のほかに、宗像古墳群・陰田古墳群⑰など群集墳が盛んに造られるようになり、主体部は追葬を意識した横穴式石室や大型箱式石棺等に変わる。東宗像古墳群①の堅穴系横口式石室は横穴式石室の導入期のものである。また宗像1号墳のように前方後円墳にも横穴式石室が採用されている。古墳時代終末の古墳として觀音寺7号墳④などの方墳が確認されている。一方出雲地方の影響を受けて6世紀後葉に横穴墓の築造が始まり、比較的規模の大きな横穴墓群として大塔山横穴墓群⑧・東宗像横穴墓群⑨・小横穴を含めて50基の横穴墓が確認されている陰田横穴墓群⑩等があり、四ツ塚谷地区には今回調査した横穴墓の他にも隣接する青木向横穴墓群⑪も含めて小規模ながら多くの横穴墓が確認されている。その他米子では絶泉寺山横穴墓群⑫・口陰田横穴墓群⑬・勝田横穴墓群⑭・宮畠横穴墓群⑮・日焼山横穴墓群⑯・南御所原横穴墓群⑰・新山岡横穴墓群⑱等が知られている。後期の集落として吉谷遺跡⑯のように丘陵緩斜面に営まれるようになる。

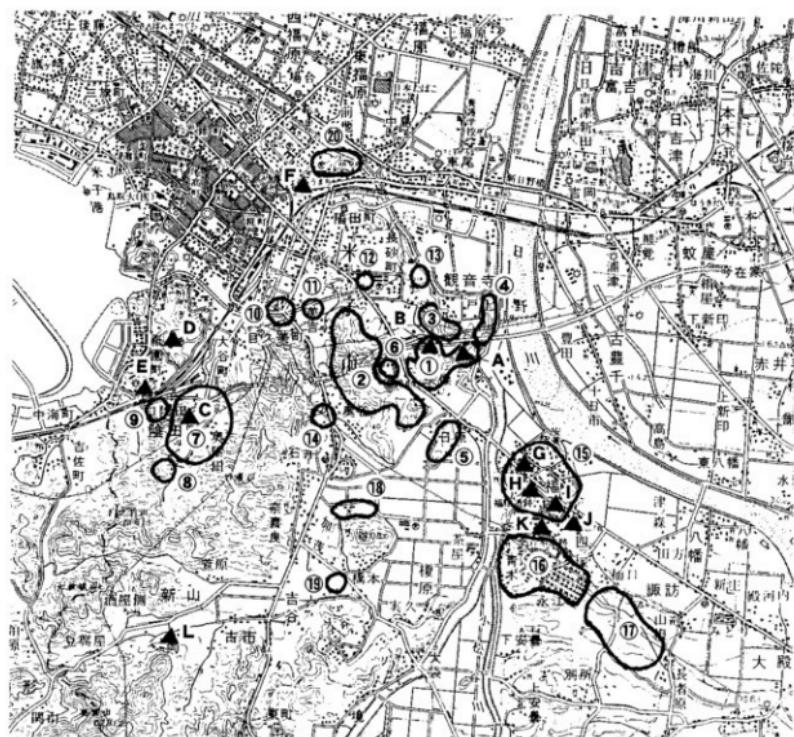


図1 唐辽遺跡分布図 ( $S=1:50,000$ )

▲……横穴墓

周辺横穴墓分布一覧表

A 大塔山横穴墓群	B 東宗像横穴墓群	C 陰田横穴墓群
D 総泉寺山横穴墓群	E 口陰田横穴墓群	F 勝手山横穴墓群
G 宮畑横穴墓群	H 日焼山横穴墓群	I 四ツ塚谷横穴墓群
J 南御所原横穴墓群	K 青木向横穴墓群	L 岡横穴墓群

周辺遺跡分布一覧表

① 東宗像古墳群	② 宗像古墳群	③ 長砂古墳群
④ 観音寺古墳群	⑤ 日原古墳群	⑥ 宗像遺跡
⑦ 陰田遺跡群	⑧ 陰田1号群	⑨ 口陰田遺跡
⑩ 目久美遺跡群	⑪ 池ノ内遺跡	⑫ 長砂遺跡
⑪ 水道山古墳	⑫ 奥谷遺跡	⑬ 福市遺跡
⑬ 青木遺跡	⑭ 諏訪遺跡	⑮ 奈喜良遺跡
⑭ 古谷遺跡	⑮ 勝田遺跡	

### III 調査の概要

今回の発掘調査の横穴については、『ブルドーザーが斜面を削った時、前庭部につもった黒土が長方形にあらわれたので発見されたもの』となっており、『丘陵の南西側斜面の中央部の裾に5基の横穴群がある。』<sup>注1)</sup>と記述されている。その5基の横穴のうち、1号横穴については、『真上に階段をつける際にブルドーザーが落ちこんだもの』とあり、1966年10月13日、14日に緊急調査が鳥取県教育委員会の亀井照人氏によって実施され、その後に消滅している。2号横穴については、山陰考古学研究所による発掘調査が実施され、そのまま現状保存されていた。3～5号横穴については、残存していると考えられたが、今回の発掘調査ではその内の3、5号は確認し発掘調査を実施したが、4号については、その所在が確認できなかった。当時、作成された遺跡分布図<sup>注2)</sup>から判断すると2、3号は現在ある階段の右側（東側）、4、5号は階段の左側（西側）に所在することになり、4号は階段に近接すると考えられるが、確認できなかった。今回の発掘調査では、階段のすぐ近く（左側）で斜面に黒色土の堆積した部分があり、掘り進めたが、すぐ地山となった。4号横穴とされた黒土がこれに該当すると仮定すれば、4号横穴は未完成の横穴であったと推定される。したがって、福市四ツ塚谷横穴群の横穴5基については、1号は緊急調査後消滅、2号、3号、5号は今回の調査後消滅、4号は未確認（未完成横穴？）となる。

註1)『福市遺跡の研究』山陰考古学研究所 1969年

註2) 註1)と同じ

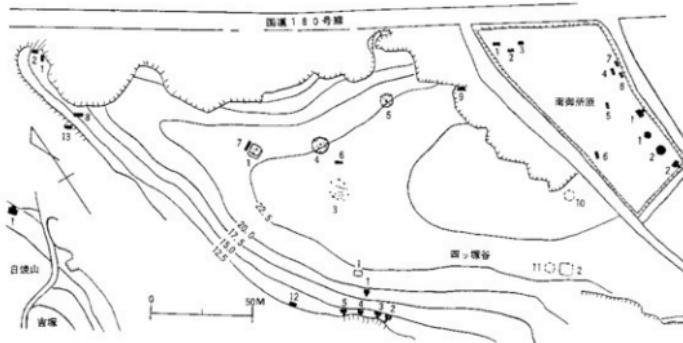


図2 四ツ塚谷・南御所原地区遺跡分布図 (註1より転載)

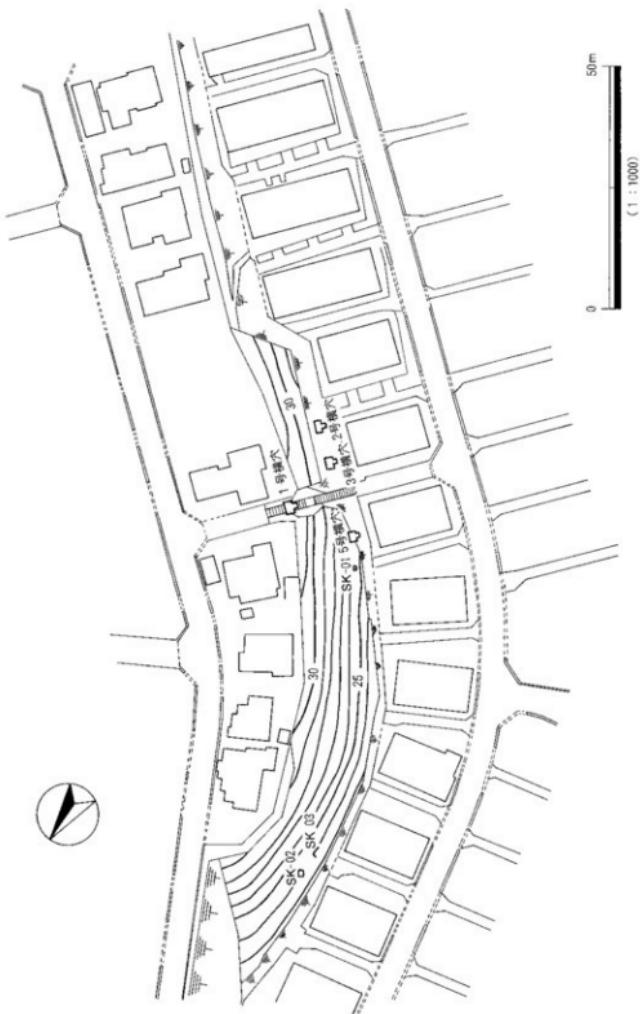


図3 遺構分布図

## IV 調査の結果

### (1) 1号横穴墓（図4）

四ツ塚谷横穴墓群中、最高所に位置する1号墓は、他の4基と異なり斜面中腹に営まれている。1966年10月13日、斜面に階段をつける作業中にブルドーザーが落ち込んで発見されたもので、1966年10月13日～14日にかけて緊急調査を行った。

1号墓は南西向きに開口している。前庭部は閉塞部に向かって徐々に幅を狭めていき、最奥部で幅1.30mを測る。床面は約4°の傾斜を持ち、玄室に向かって緩やかな登りとなっている。前庭奥壁を掘り込んだ羨道閉塞部は幅1.10m、長さ0.30mを測り、さらに幅を狭めた羨道が掘り込まれる二重構造となっている。この部分の天井は認められないが、崩落によるものか、もともと無かったのかは不明である。床面には幅96cm、長さ100cm、厚さ22cmの板石が前庭部に向かって倒れた状態で検出されており、この板石で閉塞されていたものと考えられる。

羨道は僅かに左にカーブしながら1.92m続き、玄室前壁中央に取り付いている。前庭部側で幅0.67m、玄室側で0.96mを測り、奥へ進むほど幅が広くなっている。横断面形は天井部が緩やかなアーチを描く釣鐘形を呈し、高さは0.93mを測る。床面には左右壁際に玄室から続く幅10cm前後の側溝が掘り込まれ、閉塞部まで続いている。床面の傾斜は前庭部と同じである。前庭部から羨道の主軸はN57°Eをとる。

玄室は平面形は奥行き2.28m、奥壁側幅2.10m、玄門側幅2.40mの少し歪んだ正方形プランで、周縁部には側溝が掘り巡らされている。ブルドーザーの転落のために天井部中央が失われているが、平入り断面三角形の天井形態をとるものと思われる。断面形をみると、奥壁と前壁は緩やかなカーブを描きながら棟線に向かって立ち上がるが、左右側壁は床面から直線的に内傾して立ち上がり、1m前後の高さで傾斜角度を変え、さらに内傾して棟線に向かっている。棟線の長さは玄室横断床面長の3/4前後の小さいものとなると推定される。玄室の主軸は羨道までと異なり、N57°Eとなる。

出土遺物（図5）としては、直刀片1、刀子片1、鐵鎌片数点、須恵器鏡1、高杯1、蓋杯1組、土師器片若干があったが、現在所在不明のため詳細を観察できない。須恵器蓋杯1組、高杯1点について調査後に作製された実測図が残されている。これによるとNo.1は完成品で、口径9.5cm、器高3.8cmを測る小型の杯蓋である。天井部は丸く、11縁部との境界は見られない。No.2も完成品で、口径8.4cm、器高4.3cmを測る小型の杯身である。立ち上がりは極端に矮小化して受部と同じ高さになっている。No.1とNo.2はセットになるものと思われる。No.3は口縁の3/5を欠損する。口径8.3cm、器高4.6cmを測る小型の高杯で、椀状の杯部に脚径4.8cmの小さな脚が付いている。No.1～3はいずれも焼成は良好であり、色調は青灰色を呈し、胎土には砂粒を含んでいる。2と3には一部自然釉が認められる。これらは形態的特徴などから、陰田須恵器編年8期に相当するものと考えられる。

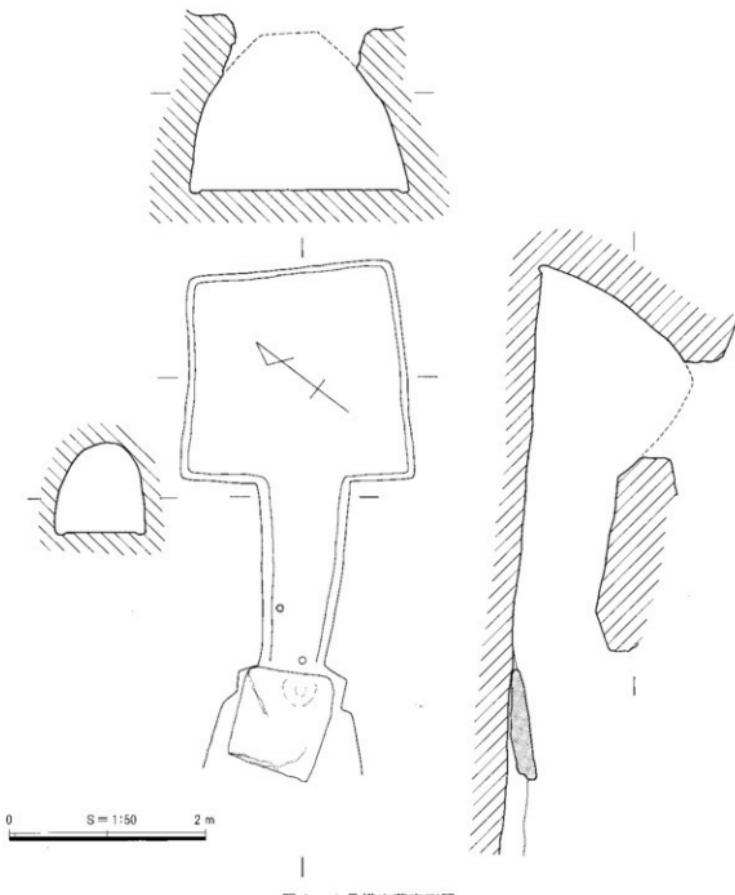


图4 1号横穴墓实测图

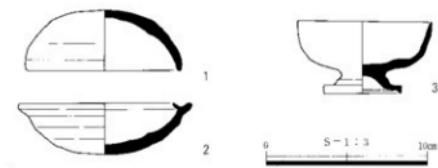


图5 1号横穴墓出土遗物

(2) 2号横穴墓<sup>註3)</sup> (図7)

横穴：南西に開口した全長3.55mの切妻・平入り横穴で、葬道は長さ1.2m・幅60~80cm・高さ75~90cm、玄室は、長さ2.35cm・幅2.6m・高さ2mで床に円礫を敷いている。遺骨1体が頭を北西にむけ、奥壁から1mぐらい離れて平行に置かれていた。頭のそばにカスガイがあり、木棺に入れて葬られたことを推測させる。性別、年齢については未調査であり、いずれ専門家の判定を得る予定である。

副葬品(図6)：須恵器8・土師器高环1・直刀1・刀子2・鉄鎌1・カスガイ4で、ほとんど玄室中央に置かれていた。蓋坏(No.4) 口唇は丸味をおび、口径10cmで坏底を削り残す。坏(No.5) 口径9cmで蓋受けの立ち上がりはほとんどなく傾斜し、山陰第4期のもの。(No.8) 口縁がほぼ垂直に立ち上がり、偏平である。蓋坏(No.6・7) は口径14cm・器高4.5cmの茶碗形。蓋は口径15cmで輪形のつまみをもつ。短頸瓶(No.9) 口径8cm・器高7cmで、口唇は丸味をもつ。直口壺(No.10) 器高20cmあり、頸部と肩部に平行沈線をめぐらす。口唇はそがれ、胴部は4面とも、たたきによる平面をもつ。高坏(No.11) 土師器であり、坏部は籠みがきと刷毛によって調整されている。

直刀(No.18)は長さ33cm<sup>註4)</sup>ぐらいで刃部幅3cm。鋳造が著しい。木質が附着しており、鞘がついていたと思われる。手元には、楕円形で6個の小孔をが穿つツバがついており、目釘で止めてある。刀子(No.14)は長さ10cm・幅8mmの小形で、茎には木製柄をつけたらしく、木質が残る。鞘つり金具(No.12、13)は、身をつる部分は欠失し、ひも通し孔のみ残っている。カスガイ(No.15~17)は木棺のものらしくコの字に曲がった柱状のもの、先端は鋭い。

註3)『福市遺跡の研究』山陰考古学研究所 1969年より引用

註4) 直刀の長さは圓面からみると66cmと思われる。

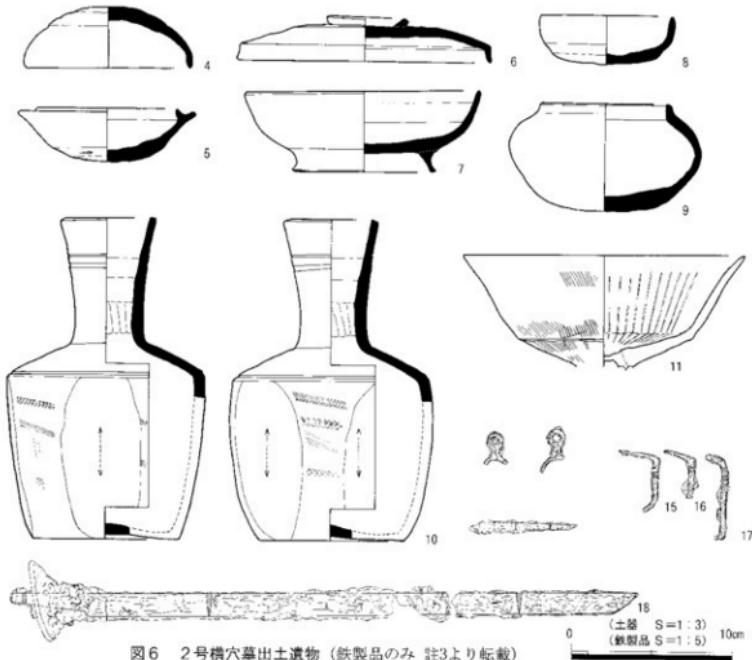


図6 2号横穴墓出土遺物 (鉄製品のみ 註3より転載)

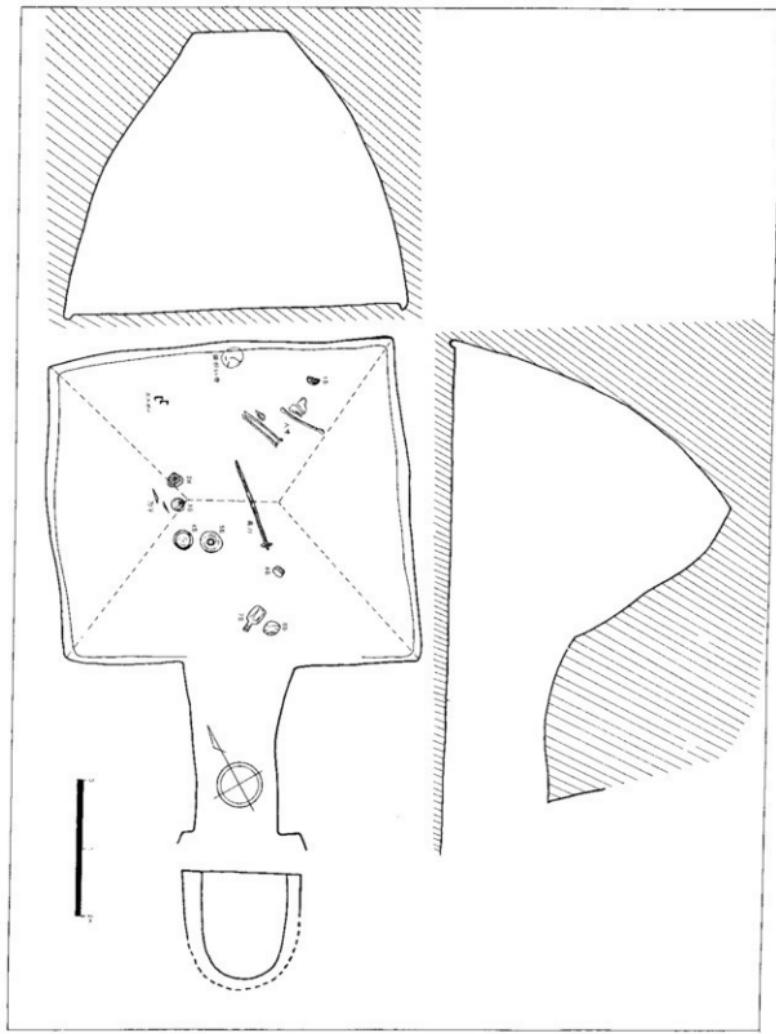


図7 2号横穴墓実測図（註3より）

(3) 3号横穴墓 (図8)

**位 置** 2号横穴と現在の階段の間にあり、丘陵斜面の標高約25m前後に位置している。

**玄 室** 長さ（奥行）1.95m、幅2.06mのほぼ正方形であるが、玄門側がやや広がっている。形態は、断面三角形で妻入りを呈し、高さは、1.82mを測る。周囲に幅10cm、深さ10cmの溝が全周している。天井の稜の長さが床面の長さの約 $\frac{1}{4}$ の約0.48mと短い。

**前 庭** 市営住宅造成時に削平を受けており、消滅している。

**羨 道** 一部削平を受けており残存部分で幅0.73mを測る。

**出土遺物** 古く開口しており、盗掘などにより散逸したと考えられる。

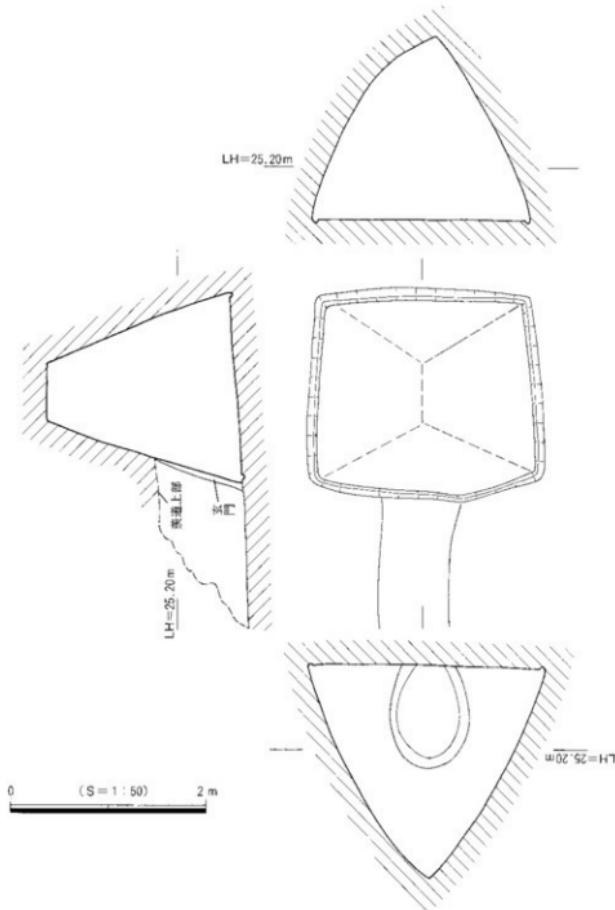


図8 3号横穴墓実測図

#### (4) 5号横穴墓 (図10・11)

**位置** 主軸は横穴のほぼ中央N54°30' E方向に設定し、南西方向に開口する。全長4.94mを測り、開口部レベルは23.0mで高低差は約35cmである。

**玄室** 玄室床面の平面形は玄門のやや広がった台形を呈する。横断面形は台形で、四注式系三角形断面平入の天井形態をとる。一部壁面が剥落した箇所があったが、掘穿時の削痕等は見られず、丁寧な仕上がりになっている。玄室規模は奥行1.85m・幅1.8~2.0mを測る。高さの最も高い所はほぼ中央部で1.7mを測る。床面はほぼ平坦だが、玄門に向かって若干傾斜し、全体に北側に傾斜している。壁に沿って幅12cmを前後、深さ6cmの溝を巡らし、羨道に続いている。開口当初玄室内には砂がほぼ平坦に堆積しており、土器等がこの砂の上から検出されていたため、意図的に敷き詰めたものではないかと思われた。しかしながら溝の中に砂が入り、砂の下からも土器を検出した。さらに床面から約10cmのところに冠水と思われる痕跡が残ることからみて流入土と思われる。

**羨道** 羨道は両側を袖状に掘り残し、断面形は釣鐘形を呈する。長さ1.6m、幅玄室側0.8m、前庭側0.65m、前庭部に向かって緩やかに傾斜し、高低差は10cmである。両壁際には幅6~10cm・深さ5cmの溝を玄室からの引続きで施す。羨道部と前庭部の境界は段を設けて羨道部を13cm高くしている。そして溝はこの部分で切れている。

**前庭** 前庭床面の平面形は、谷側に広がる台形を呈する。前庭部の規模は長さ1.1m・幅羨道側1.18m・谷側1.47mを測る。壁際に比べやや中央部が低くなっている。

**閉塞** 玄門には二段に掘り込まれ、奥から第1羨門・第2羨門とする。第1羨門の残存高1.16m・幅0.94m、第2羨門の残存高0.97m・幅1.18mである。第1羨門と第2羨門との間は0.48mあり、羨門側幅0.94m・前庭側幅0.87mである。羨道部下第1羨門において横溝を確認し、閉塞板があったことがうかがえる。第2羨門部には何も痕跡がなくこの部分で閉塞がなされていたのか否か、何を意味していたかは不明である。

**出土遺物 (図9)** 玄室内より1体分の人骨の一部を検出。奥壁側に頭を北側にして埋葬されていたようで、頭蓋骨の一部を北側で、大腿骨の一部を南側で検出した。歯は頭蓋骨からはなれて南側袖部付近でかたまつて検出した。その他頭蓋骨の側に耳蓋 (No21)、大腿骨の側から环身 (No22)、歯の側の溝の中に横たわった状態の高坏 (No20)、その側に壺 (No19) がやや浮いた状態で検出された。その他鐵鎌の被覆 (頭) 部の一部 (No25) と思われるもの、数点の土器片を検出した。破片の検出が盗掘によるものか、追葬によるものかは判断しかねる。

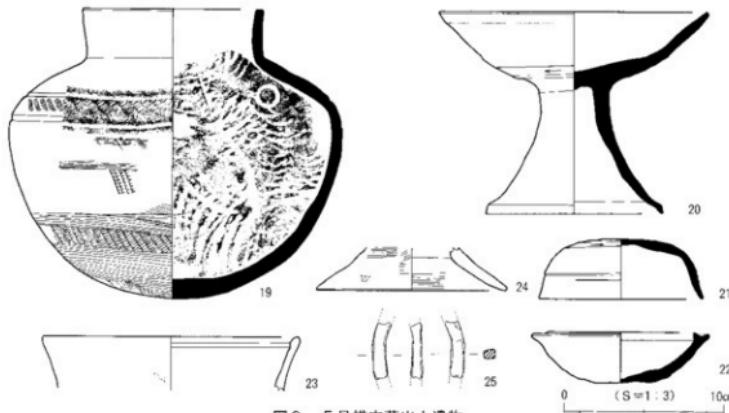


図9 5号横穴墓出土遺物

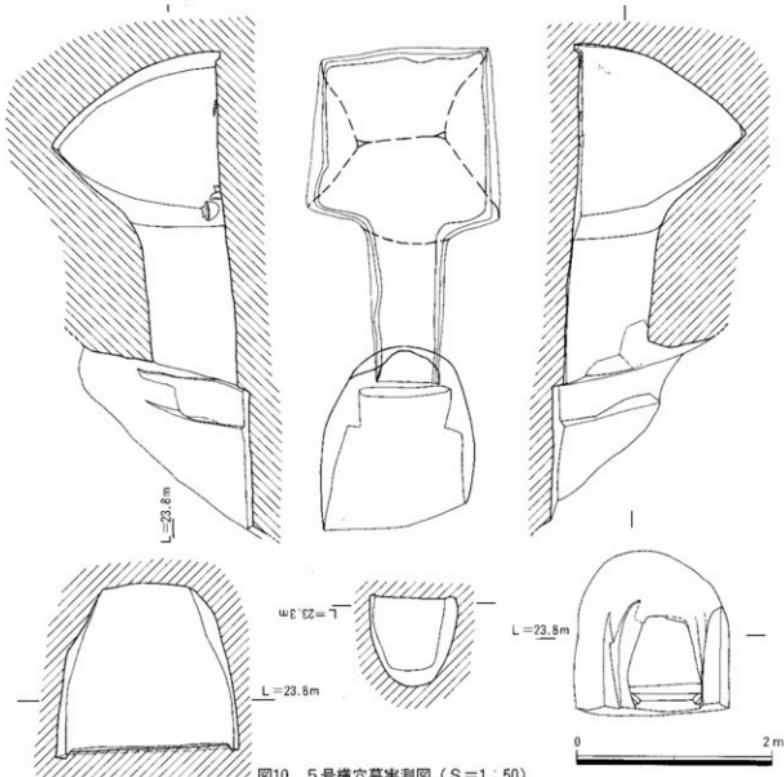


图10 5号横穴墓实测图 ( $S=1:50$ )

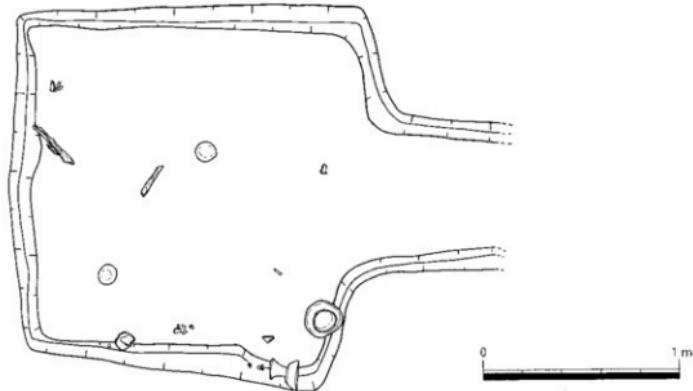


图11 5号横穴墓遗物出土状况图 ( $S=1:25$ )

(5) その他の遺構 (図12)

**SK-01** 平面形が隅丸長方形の落し穴と思われる土壙である。上部長軸は95cm・短軸67cm、底部長軸は51cm・短軸39cm、最大深さ80cmを測る。底部中央部よりやや南よりをさらに径約15cm・深さ31cm掘り下げる。遺物等は検出されなかった。

**SK-02** 平面形が隅丸長方形でSK-01と同様落し穴と思われる。上部長軸は149cm・短軸131cm、底部長軸は72cm・短軸62cm、最大深さ166cmを測る。底部中央部を径20cm・深さ43cmさらに掘り下げる。SK-01と比べるとかなり大型である。遺物等は検出されなかった。

**SK-03** 斜面に掘り込まれているため谷側部分は消滅しているが、「L字状」の掘り込みを検出した。長軸約170cm・残存短軸100cmを測り、床面は緩やかな傾斜になっているが、壁際の深さは22cmである。上面より甕口縁部(No.26)を検出したが、この遺構に伴うものか否かは判断しかねる。また床面の一部に粘土が入り込んでおり、この部分を掘ってみたが、径約70cm・深さ10cm程度の落込みになり、中からは何も検出されなかった。この土壙の性格は明らかではないが、遺物がこの遺構に伴うものであれば、4世紀末～5世紀初めのものであると考えられる。

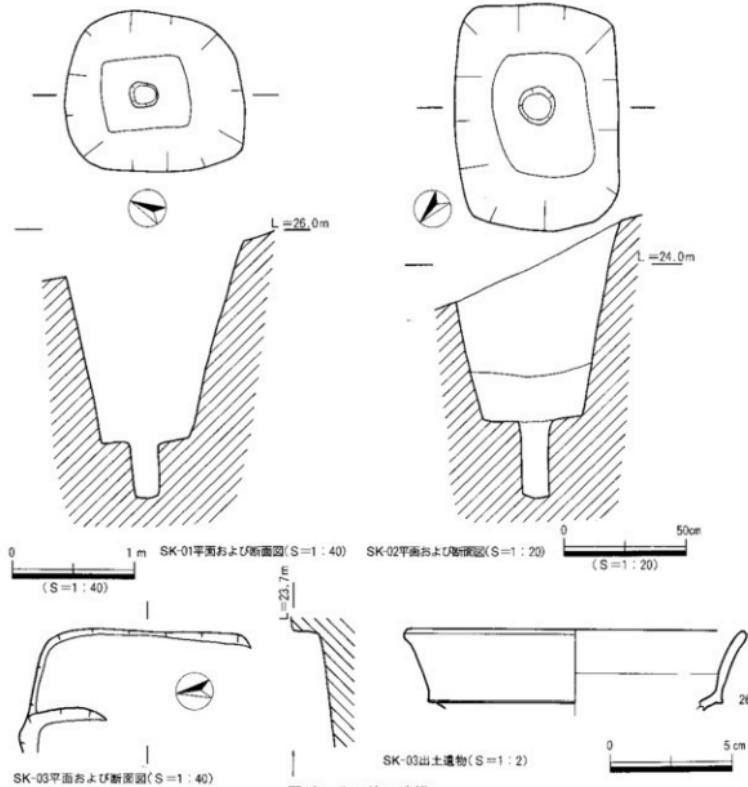


図12 その他の遺構

# V 附 編

## 「米子市四ツ塚谷遺跡5号横穴墓から検出された人骨に関するコメント」

鳥取大学医学部解剖学第二講座

井 上 貴 央

### 1.はじめに

本報告は、米子市四ツ塚谷遺跡5号横穴墓から検出された人骨の記載である。骨の保存状況はきわめて悪く、調査団の手によって骨が取り上げられ、後日筆者のもとに同定を依頼されたものであって、検出状況については詳細に検討していないことを断わっておく。

### 2. 検出状況

調査団によって描かれた発掘図面を見ると、骨は横穴内に無秩序に分布しており、骨の対応関係はまったく不明である。図面に示された骨はきわめて数が少なく、骨の保存状況が悪いことが窺える。

### 3. 検出人骨の記載

調査団によって付された人骨の取り上げ番号に基づき、骨の部位やその特徴について述べる。

No.8 大腿骨の骨体であるが左右の判定は不可能である。大きさからみて男性骨を窺わせるが確信できない。骨の形態から判断して、後述するNo.13の大腿骨とは明らかに別個体のものである。

No.9 左上顎第2大臼歯の歯冠部分と左下顎第1大臼歯及び部位不明の小骨片である。前者の歯は、咬耗はエナメル質にとどまっているが、後者の歯牙は一部象牙質まで咬耗が及んでいる。

No.10 左下顎第2大臼歯の歯冠部分である。咬耗はエナメル質にとどまっている。

No.11 頭蓋骨の一部で7点ほどの細片になっている。頭蓋冠の部分であることはまちがいないが、部位は特定できない。骨板はきわめて薄く、女性骨もしくは年少者の骨であると思われる。

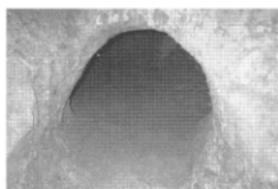
No.12 頭蓋冠を構成する骨で、19点に割れた状態で検出されている。この中には前頭骨の右側、左右の頭頂骨が含まれている。これらの頭蓋骨は、かなりの厚みがあり、男性骨を窺わせるのに充分である。矢状縫合は外板では未閉鎖の状態にあるが、内板では癒合が進んでおり、年令的には熟年と考えられる。

No.13 右大腿骨骨体の後部の骨で、10点の小片に割れた状態で取り上げられている。筋の付着部である粗線の発達は悪く、骨質も薄いことから女性骨である可能性が強い。

No.14 7点ほどの長管骨片であるが、部位を特定できない。

### 4. 被埋葬者について

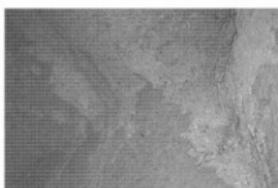
今回検出された骨から判断する限り、少なくとも2体の埋葬がおこなわれていたことは確実である。1体は熟年男性、もう1体は成年の女性である。この他に年少者の埋葬があった可能性があるが、確言できない。被埋葬者の身長については完全な長管骨が検出されていないので推定は不可能である。



2号横穴墓  
正面



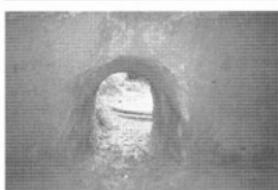
2号横穴墓  
内側より



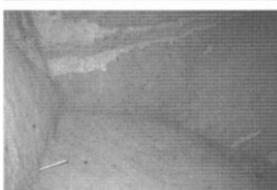
2号横穴墓  
天井



3号横穴墓  
正面



3号横穴墓  
内側より



3号横穴墓  
天井



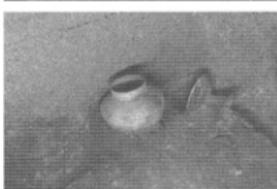
5号横穴墓  
正面



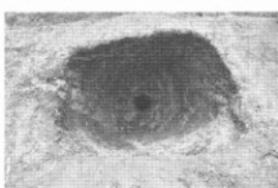
5号横穴墓  
内側より



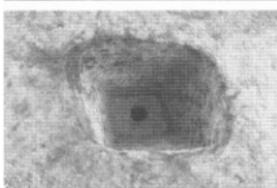
5号横穴墓  
天井



5号横穴墓  
遺物出土状況



SK - 01



SK - 02



4



5



6



7



8



9



10



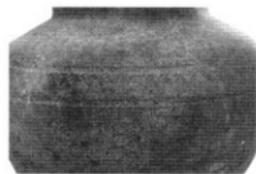
11



11



19



19



20



21



22

(財) 米子市教育文化事業団文化財発掘調査報告書 8

鳥取県米子市  
福市四ツ塚谷横穴墓

1994年3月

編集・発行 財団法人米子市教育文化事業団

〒683-0822 鳥取県米子市中町20

印 刷 (有)米子プリント社